

表現運動授業における効果的な技能評価について : 技能ルーブリックの活用と有効性の検討

木山慶子 (群馬大学)

1. 緒言

(1) 問題の所在と目的

1) 小学校体育授業での「表現運動」実施率

「表現運動」は、小学校体育における必修領域でありながら、その実施率は100%ではない。表現運動授業実践状況の調査(群馬県小学校体育研究会, 2015)における群馬県内323校(99.4%)からの回答では、体育の授業において「表現運動」の授業を実践している小学校の割合は、学年別に1年92.1%、2年88.9%、3年47.9%、4年49.6%、5年77.8%、6年48.4%となり、3、4、6年において5割以下に留まっている結果となった。

2) 指導内容の不明確さについて

高橋(2016)は、特に男性教員は「踊った、指導した」経験に乏しくダンス指導が難しいと感じていると述べ、さらに、この背景として、「小中高でダンスの授業を受けていない、教員養成大学でダンスが必修化されていない、教員採用試験でのダンス実技がない、ダンスの指導内容がわからない」などがあると述べている。寺山(2007)は、「表現運動」を指導する際の困難さとして①学習内容の不明瞭さ②児童の反応と指導者の対応③指導言語④教材の準備⑤授業時間の確保などについて考察している。大西ら(2013)は、ダンスの指導内容はわかりにくく、そのため、学校ではダンスの授業が敬遠されるという状況が繰り返されてきた、とする。このように、教師にとっての表現運動の指導内容のわかりにくさの現状は依然ある。

そこで、本研究では、表現運動における「技能」を具体化することによって、身につけさせたい技能を明確にする。さらにそれらを基にルーブリックを作成、活用することによって子どもたちの学習成果を高めることを目的とした。

なお、本稿では、研究前半として、技能を具体化し指導することによって学習効果が高まることについて調査結果をもとに述べる。

2. 研究方法

(1) 対象及び期間

5つの小学校表現運動授業における教師及び学習者を対象とした(表1)。学習指導要領に示す「技能」をより具体化させ、授業を展開した。

表1 授業概要

	学年	指導教師	体育免許	指導回数	実施時期
授業①	6	女性:教員歴5年	有	初	2016.11
授業②	5	女性:教員歴30年以上	有	毎年	2016.11
授業③	5	男性:教員歴30年以上	有	初	2017.10
授業④	6	男性:教員歴10年	無	初	2018.11
授業⑤	6	男性:教員歴8年	無	初	2019.11

(2) 調査項目

学習効果を確認するため、以下の6つの項目について調査した。

- 1) 運動有能感調査、2) 形成的授業評価
- 3) 運動場面調査、4) 相互作用調査
- 5) 学習カード、6) 授業映像

3. 結果と考察

(1) 表現運動における「技能」の具体化

1) 学習指導要領に記載されている高学年の「技能」を表2に示す。

表2 高学年における「技能」

題材	即興的なひと流れへの動き	簡単なまとまり
① 激しい感じの題材 ② 群(集団)が生きてくる題材	・ひと流れの動きへの工夫の仕方としては、表したい感じやイメージを、素早く走る→急に止まる。ねじる→回る。跳ぶ→転がるなどの動きで変化を付けたり繰り返したりして、激しい感じや急変する感じをメリハリ(緩急・強弱)のあるひと流れの動きにして即興的に踊ること。 ・群の動きの工夫の仕方としては、集まる(固まる)→離れる。合わせて動く→自由に動くなど、表したい感じやイメージにふさわしい簡単な群の動きでひと流れの動きにして即興的に踊ること。	① 動きの変化や繰り返す(素早く走る→急に止まる。ねじる→回る。跳ぶ→転がる)。 ② 動きに緩急・強弱をつける ③ 群の動き(集まる(固まる)→離れる。合わせて動く→自由に動く)
③ 多様な題材	・動きの誇張や変化の付け方としては、表したい感じやイメージを、素早く走る→急に止まる。ねじる→回る。跳ぶ→転がるなどの差のある動きや急変する動きを入れるなどして、変化とメリハリ(緩急・強弱)のあるひと流れの動きにして即興的に踊ること。	① 動きの差(素早く走る→急に止まる。ねじる→回る。跳ぶ→転がる)や急変する動き ② 動きに緩急・強弱をつける ③ 簡単なひとまとまりの動きへの工夫の仕方としては、表したい感じやイメージを強調するよう「はじめ→なか→おわり」の構成や群の動きを工夫したり、特にラストシーンを印象的にしたりして、個人やグループの持ち味を生かした簡単なひとまとまりの動きにして、仲間と感じを込めて通して踊ること。

2) 1) を踏まえ、5 つの授業において具体化した「技能」を表 3 に示す。

表3 授業で具体化した技能

授業①	単元時間	具体の技能						
		速く・遅く	大きく・小さく	高く・低く	近く・遠く	繰り返す	つなげる	おわりを作る
授業②	4	速く・遅く	大きく・小さく	高く・低く	近く・遠く	繰り返す	つなげる	おわりを作る
授業③	4	速く	遅く	小さく	大きく	3秒止まる		
授業④	2/4	大きく-小さく	高く-低く	速く-遅く				
	3/4	スローモーション	早送り	巻き戻し	停止	繰り返し		
	4/4	はじめ-なか-おわり						
授業⑤	5	動きを変える	大きさを変える	強さを変える	速さを変える			

(2) 調査結果

1) 運動有能感

授業③では、全体及び 3 因子すべてにおいて得点が上昇した (表 4)。

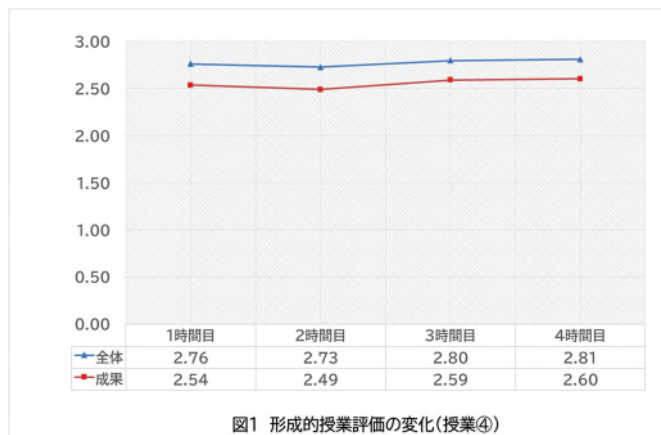
表4 運動有能感得点の変化(授業③)

因子	単元前	単元後	
身体的有能さの認知	13.26	14.76	**
統制感	16.50	18.39	*
受容感	17.26	18.76	*
全体	47.02	51.81	**

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

2) 形成的授業評価

授業④では、全体及び成果次元において得点が上昇した (図 1)。



3) 体育授業場面調査

授業④⑤において運動学習場面が 4 割を超えた (表 5)。

表5 体育授業場面(%)

授業	学習指導(I)	認知学習(AI)	運動学習(A2)	マネジメント(M)
④	22.1	19.7	47.3	8.6
⑤	37.4	13.2	42.1	7.5

4) 教師の相互作用調査

授業④では、相互作用が 122 回という結果となった (表 6)。

表6 教師の相互作用(回)

授業	発問	フィードバック			励まし	計
		肯定	矯正	否定		
③	3	14	20	0	2	39
④	49	67	6	0	0	122
⑤	23	11	13	0	8	55

5) 学習カードの分析

授業①の子どもの学習カードの自由記述について KH-coder による分析及び共起ネットワークを作成した (図 2)。

「スローモーション」「再生」などの技能についての語が抽出され、関わりのある語として認識されていると推察できた。

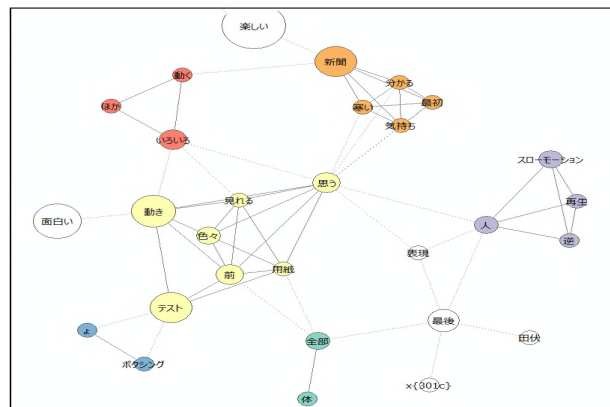


図2 子どもの自由記述の語の共起ネットワーク図

6) 授業映像からは、単元時間が進むにつれ、子どもたちの技能の向上が見て取れた。

4. まとめ

技能をより具体化して、子どもたちに示すことは、学習内容がより明確となり、学習効果の向上に有効であることが示唆された。今後は、これらを踏まえた技能ルーブリックの作成と活用について検証する。

引用・参考文献

- 相馬秀美 (2018) 教員養成系大学における現代的なリズムのダンスの指導法授業に関する一考察、日本女子体育連盟学術研究 34 : 39-51
- 與儀幸朝ほか (2012) パフォーマンス課題・評価を取り入れたダンス授業の比較的研究. 琉球大学教育学部紀要 (81) : 315-326 他